

UDLM

2

vol.342

February 29th
2024

桜
梅
桃李

それぞれの道へ

都内でも警報級の大雪が降った2月。
雪が降り積もる中、修士2年生と学部4年生は、
研究や設計という形で学びの成果に花を咲かせた。
今月号は、その成果や過程について振り返る。

- p.2 デザ研修論テーマの10年
- p.3-5 2023年度 修士論文の足跡
- p.6-8 2023年度 卒業設計・卒業論文の足跡
- p.9 修論 & 卒論 + 卒制のウラガワ

△浜離宮恩賜庭園の春の景。梅と菜の花が寒さの中に温もりを添える。背後に高層ビルが聳える景色はここならではの。

デザ研修論テーマの10年

修士研究において、研究テーマや研究手法の決め方は研究分野や研究室によって様々であるが、都市デザイン研究室は多様なバックグラウンドをもった学生が集まり、各個人の「都市」に対する課題意識を元にテーマを設定するため、「都市デザイン」を基盤としつつ、幅広い領域の研究を行っている。実際、他の研究室の学生からデザ研の研究はテーマの自由度が高いと言われる

ることも多い。そこで直近10年間の修士研究の研究題目を参照し、主に対象地の属性に着目したところ、キーワードによって分類することができた。あくまでも筆者による主観的な分類であり、題目のみから容易に判断できないものや複数のキーワードに関わるものもあるが、以下のように、都心部から地方部まで幅広い都市空間を対象にして研究が行われている。

農地・農村

- 21' 農村のおもてなし空間・行政関与 / 愛媛県内子町 / 実態
- 17' 基本計画・農地ゾーニングと地域ブランド / ヴェネト州、Valdobbiadence 市 / 実態
- 16' 既成市街地旧農業用水路空間 / 川崎市管地区 / 残存・利用実態
- 14' 生産緑地法改正前・都市農業 / 東京都世田谷区・練馬区 / 実態

温泉地

- 21' マスツーリズムの引き潮後の温泉都市・景勝地 / 石川県加賀市片山津温泉・山代温泉・山中温泉 / 空間変容
- 22' 大屋層の解体過程・空間構造 / 伊香保温泉石段街 / 変容

空き地・空き家

- 23' 空き家活用過程の外部効果 / 長野市善光寺門前エリア / 実態・意識
- 21' 原発被災後の空き地への手入れ / 福島県小高・浪江・富岡 / 実態

駅・鉄道沿線市街地

- 23' 駅員無配置地方駅・本屋遊休スペース / 地方無人駅 / 活用実態
- 19' 駅接統路 / 総社 / 形成史
- 16' 住民活動団体 / 小湊鐵道沿線 / 主体の生成と連携

歴史的市街地

- 23' 宿場町起源の町並み構成・個性の継承 / 東京近郊 / 実態
- 21' 歴史的市街地・観光と住環境の関係 / 京都府宇治市宇治地区 / 変容
- 21' 歴史的市街地・文化的景観 / 宇治市宇治地域 / 形成過程
- 16' 市街地履歴・城下町縁辺部 / 長野県松本市 / 空間形態
- 16' 空地の地域構造と所有、流通 / 福井県坂市の旧三国町地区 / 実態

神社・祭礼

- 22' 屋敷神・地域への表出 / 東京都武蔵村山市 / 実態
- 21' 神社と民間都市開発事業 / 六本木天祖神社 / 空間整備のあり方
- 20' 祭礼行事・町家型市街地の通り沿い住空間 / 福井県津井市三国湊地区 / 空間実態

パブリックスペース

- 22' 地主・オープンスペース接合型建築物群 / 都心・郊外 / 実態
- 16' 大規模民間開発公共的空間・個人的滞留 / 都心三区 / 空間・利用実態

商業集積地・中心市街地

- 23' 暗渠沿い商業地・敷地内空地 / 旧渋谷川遊歩道 / 形態的特徴と利用行動
- 23' 旧百貨店建築物の部分活用 / 地方都市 / 活用実態
- 19' 街区更新事業・連鎖的展開 / 富山市中心商業地区 / 総曲輪 / 実態
- 18' 支店経済・発展段階論考 / 福岡市 / 史的研究
- 17' 再開発ビルにおける飲食系個店集積 / 大阪府上六地区 / 空間特性
- 12' 都市開発の集团的意図 / 福岡市都心部 / 意識

簡易宿泊施設・ゲストハウス

- 20' 機能分散型宿泊施設・銭湯志向型ゲストハウス / 京都市 / 実態
- 12' 外国人個人旅行者向け宿泊型ゲストハウス / 浅草地区 / 実態

繁華街・遊郭・花街・遊園地

- 19' 東京繁華街におけるビルの形成 / 上野下谷 / 都市空間史
- 18' 花街 / 小岩 / 都市形成史
- 17' 遊郭 (日本植民地都市計画論) / 台湾 / 立地
- 17' 高度成長期横丁 / 山梨県甲府市中央1丁目 / 史的研究
- 16' 界隈性のある体験創造型商店 / 小田原市 / 立地要因
- 16' 遊園地・テーマパーク跡地の施設残存型利用 / 全国 / 実態

産業・工業都市

- 20' 軍港都市・分節性の発現 / 呉 / 都市形成史
- 17' 皮革関連産業集積地 / 台東区北部 / 都市空間特性
- 15' 中央卸売市場群 / 東京 / 立地の変遷
- 15' 地域アイデンティティ / 築地場外市場 / 関係主体の変遷
- 15' 震災復興・高度成長期の小工業地 / 千代田区神田 / 実態と変容
- 15' 大規模工場跡地の土地利用転換 / 臨海部高戸製鉄所跡地 / 緑地の役割
- 14' 複合産業都市の生産空間の形成 / 苫小牧市 / 意識の醸成

集落・町並み

- 20' 集落空間構造・沢 / 三陸リアス沿岸漁村・気仙沼市唐桑地域 / 変化
- 18' 地域型住宅への更新による町並み再生 / 富山市八尾町諏訪町 / 実態
- 16' 中山間地域・地域自治組織と集落 / 島根県雲南市海潮地区・波多地区 / 実態
- 14' 多元的非営利セクター・積極的非都市化 / デトロイト / 実態

Rural area

ニュータウン

- 21' 首都圏郊外集合住宅団地・近隣農村集落再生 / 市街地縁辺 / 実態
- 18' 土地区画整理事業・ニュータウン・センター / 港北ニュータウン / 計画と形成
- 15' 遠郊外ニュータウン・都市像 / あすみが丘 / 変容
- 13' 非居住系用途混在 / 千葉ニュータウン西部 / 実態と変遷

Suburb

地域性

- 22' Settlements and their sustenance / Bhutan/History
- 22' 路地空間における生活領域 / 東京都台東区谷中 / 変容と継承
- 21' コロナ禍・中国人留学生生活を支える場所 / 東京大学本郷地域 / 実態
- 20' Urban Identity/El Chorrillo, Panama City/History
- 19' 若年層単身生活者の地域愛着 / 都市部 / 実態
- 16' 地域ブランド&ツーリズム・地域景観・食 / 相互関係
- 12' 住商混在エリア・地域性 / 吉祥寺・東急裏 / 地域性・意識

海外文化

- 21' 滞日ムスリムの墓地取得運動 / 別府 / 定性的分析
- 20' 中国ニューカマー・ホスト社会 / 西川口ニューチャイナタウン / 実態

動的景観

- 23' 動画による「人景」の認識と記述 / 池袋 / 手法

Urban area

庭園・都市公園・街路樹・自然緑地

- 22' 歴史的苑池・水系の再生 / 東京 / 実態
- 21' 並木街路街路横断方向・沿道建築物と街路樹 / 明治神宮表参道 / 景観・空間構成
- 20' 都市公園隣接店舗・地先利用 / 大阪市西区・鞠公園 / 実態
- 20' 斜面林保全条例と働きかけによる崖線空間マネジメント / 千葉県我孫子市・手賀沼北岸 / 実態

コミュニティ施設

- 21' 公立文化施設・サービスデザインの展開 / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター / プロセス
- 21' COVID-19・子ども食堂 / 東京都府中市 / 継続要因と役割の変化
- 13' 区立小中学校跡地活用 / 東京23区 / プロセス
- 12' コミュニティカフェ・つながり / 洗足・港南台地域 / 実態

都市居住

- 19' 独立型サテライトオフィスでの働き方 / 東京谷中 / 実態
- 19' 給与住宅及び大都市部集積地区 / 大都市 / 歴史的展開・空間特性

地下鉄・鉄道

- 23' 地下鉄駅接続サンクンガーデン・自然環境導入 / 東京都港区 / 計画意図と空間構成
- 20' 路面電車への公共再投資 / ウィーン市 / 施策展開
- 20' 線路脇空間・親鉄行動 / 江の島電鉄沿線 / 実態
- 12' 地下鉄出入口の利便性 / 東京都心部 / 変遷と実態

港湾・都市河川・河川沿い市街地

- 23' 祭礼の場・水際空間 / 東京内湾 / 変容
- 19' 漁業権補償地生活空間・作為慣習の移住先・持続性 / 浦安市海菜地区 / 実態
- 17' 遊歩道整備・沿川建築物 / 大阪市道頓堀川 / 変化と実態
- 12' 遊休内港地区の漸進的再生 / 大分港西大分地区、広島港宇品中央地区、徳島小松島港万代中央埠頭 / 実態
- 12' 河岸町・空間構造 / 鬼怒川上流域 / 変容

津波・洪水

- 22' 東日本大震災被災地の汽水湖の環境防災機能 / 福島県相馬市松川浦 / 変容
- 13' 総合治水制度 / 鶴見川流域 / 思想と対策実態
- 13' 津波経験地域の災害対応 / 渥美半島太平洋岸集落 / 空間変化
- 13' 建築基準法第39条災害危険区域 / 名古屋臨海部防災区域 / 景観

2023 年度修士研究の足跡

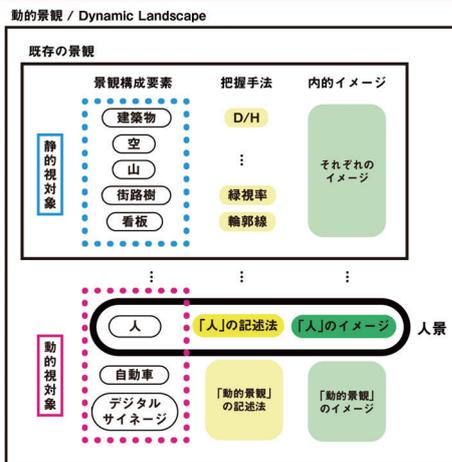
前章で直近 10 年間の都市デザイン研究室の修士研究について簡単に振り返った。本章では今年度の修士研究について、特にテーマ設定に至った課題意識や原体験に着目しながら、各個人の論文の概要を振り返る。

【質問項目】

01：研究の概要
 02：研究テーマの元となった課題意識や原体験
 03：研究で得た知見の今後の人生への活かし方

宮園侑門 | Yuto MIYAZONO

動画を用いた「人景」の認識と記述 動的な視対象としての人に着目して



01
 人が人を視対象として認識していないことには、技術的課題以上のものがあるのではないかと考え、それらの認識を「人景」として調査を行いました。「人景」の認識と記述をラスコーの壁画の頃からたどり、人が人をどのように視覚的情報として受容してきたかを系譜として明らかにしました。その後、人景を含む動的景観の枠組みについての調査法を画像解析を用いて明らかにしました。

02
 コロナの誰もいない都市 / 石川初先生の授業

03
 そこまで今と変わらないと思いますが、python をかけるようになりました。

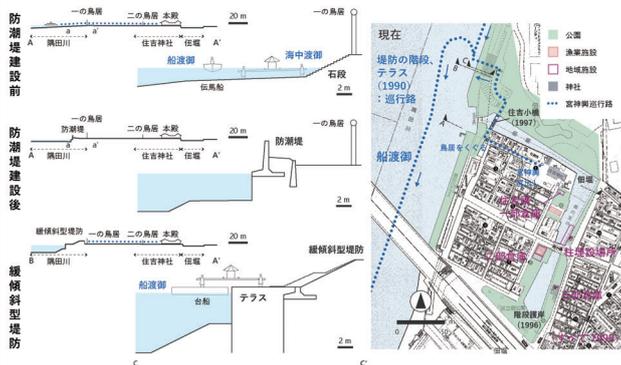
中島先生より
 前半の文献調査に基づく歴史編と後半の池袋を対象とした技術編の組み合わせは宮園さんならではの、とてもユニークでスケールが大きな修士論文となった。「人景」という概念を提起したからには、これからも探求し続けてほしい。

唐木田耕大 | Kodai KARAKIDA

東京内湾における祭礼の場としての水際空間の変容とその要因

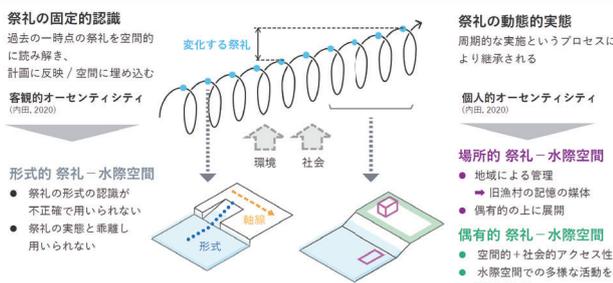


祭礼-水際空間の相互関係に親水空間の整備計画が与えた影響を明らかにすることを目的とした。東京内湾沿岸の水際空間における祭礼の記録を調査し、親水整備の前後で祭礼が継続もしくは復活した、神奈川県横浜市富岡八幡宮の祇園舟と東京都中央区住吉神社の大祭について、親水整備計画における祭礼の位置づけと、祭礼-水際空間の関係の変化を調査した。結果、祭礼の形式を空間に埋め込もうとする計画者と継続のために祭礼を柔軟に変化させる担い手との乖離が課題であり、祭礼の動態的な継承を考慮した親水整備が求められることを明らかにした。



都市から失われたものが残され、周囲とは違う時間が流れているように感じる神社の「異世界」感が昔から好きで、まち歩きや旅行で見つけたら必ずお参りしていた。

都市・ランドスケープを「良くしたい」という思いがいつのまにかデザイナー・プランナーのエゴになっていないか、誰のため/何のためのデザイン/プランかという視点を忘れてはいけないと思った。



中島先生より
 進学当初に抱いていた都市における神社の役割への関心が水際空間と祭礼という具体的なテーマへと落とし込まれていく過程を伴走できて、こちらとしては楽しかった。今後、水際を考える際の一つの思考の枠組みを与えてくれた。

佐橋慶祐 | Keisuke SAHASHI

東京近郊の宿場町起源の町並み構成に関する研究 —その個性の継承に着目して—



町並みを建築の用途と形態から捉え、その個々の建築物の組み合わせを「町並み構成」と定義した。東京近郊の8つの旧宿場町を対象としてマッピングを行い、宿場町起源の町並み構成において2つの個性を捉えた。その継承を議論する上でケーススタディとして旧草加宿を対象に、聞き取り調査を通して職住一体型の建築形式をもつ個人商店の新規担い手の実態の分析、複数の視点場での写真を通して高層建物の景観への影響の分析を行った。これらより、新規担い手と既存店舗との更なる相乗効果の可能性や道路からの後退により高層建物の景観への影響が抑えられることが明らかになった。



かつて宿場町があった地元の草加の街なかにはその歴史を伝える展示や建物がいくつか残っている一方で、近年マンションやビルなどの高層建物が多く見られる。今後、そのような旧宿場町で地域の個性が存続するにはどのようなまちづくりが良いのか興味を持った。

都市の中の現在の事象を捉える上で、現状を長期間の一時点だと考えてその変遷を仮定し分析を行うという視点を学んだ。現状が過去の変化の蓄積であるということは、宿場町に限らずどのような町並みにおいても同様で、今後まちづくりに関わる業務で地域の個性を考える上でもその視点を活かしていきたい。

中島先生より
とにかく12月、1月に、よく頑張ってまとめあげたことを高く評価したい。東京近郊の宿場町起源の町並み構成を横並びにして、それらの特徴を四象限で整理したところに、佐橋さん自身でつかんだブレークスルーがあった。

高野楓己 | Funa TAKANO

地方都市における旧百貨店建築物の活用実態 —地元資本による部分活用事例に着目して—



インターネット及び文献調査により、全国の地方都市における旧百貨店建築物の活用状況を調査しました。その中から、部分活用（「旧百貨店建築物の一部フロアを閉鎖し、他のフロアで営業を試みていること」と定義）が地元資本により行われていた、花巻市のマルカンビルと福山市のiti SETOUCHIを抽出しました。次に2つの事例について、文献調査とヒアリング調査から、部分活用のプロセスについて分析をしました。その結果、部分活用はエリアの価値を高める・できる限り早くオープンさせる・投資を抑えるといった目的があり実現されていることが分かりました。



青木先生より

旧百貨店の活用事例の網羅的整理を通じて、部分活用という手法や意義を見出した点が研究の重要な成果である。活用プロセスにおける地域主体の役割や連携方法を明らかにし、地方都市における旧百貨店の可能性を示した研究である。

私は新潟県の出身です。新潟市では3つあった百貨店のうち2つが閉店し、1つは既に建て替えられました。もう一方も建替予定です。そのことを知り、「百貨店」という都市の顔である大きな施設のあり方について関心を持ちました。全国で閉店する百貨店が増加しているなかで、一部分を活用している道はないかと調査をはじめました。

研究を通じて、花巻市と福山市に巡りあわせていただいて、多くの地域の皆様にお世話になりました。「百貨店」という大きくて難しい施設でも、地域にとって大切な場所、必要とされている場所が残されていることを学ばせていただきました。心に深く響きました。これから自分でどんどん手を動かして、できることを増やして、まちづくりに関わってまいります。

橋俊輔 | Shunsuke Tachibana

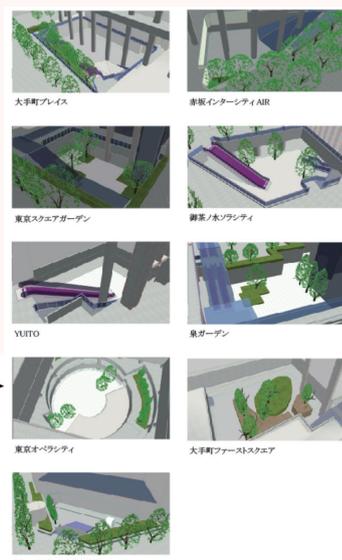
サンクンガーデンを通じた地下への自然環境導入の計画意図と空間構成 —東京都区部の地下鉄駅接続事例を対象として—



23区内計9つのサンクンガーデン事例を対象に、空間的な分析を行い、各事例の機能と空間の関係性を明らかにしました。具体的な手法は、写真を用いた空間内の景観分析と3Dモデルを用いた日照シミュレーション分析で、竣工当時の計画意図との照合を行うと、近年のサンクンガーデンは地上と地下とを接続する意図が込められている事例が増えており、日照が空間内に入ること、地下から地上の緑などが見えることが有効な手段として用いられていることが分かりました。また、周辺の開発が活発な港区や大手町などでは、竣工当初と比較して日照面などで変化が見られることが分かりました。

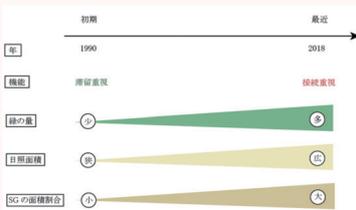
永野先生より

人工環境に自然環境をどう取り込むかは、都市建築にとって普遍的な課題です。特に地下は人にとっての「生存の拠点」となるかもしれない、この問いを止めてはいけない。そこに定量的な視点を持ち込んでくれた姿勢が、とても良かったです。



元々都心の再開発事例を散策するのが好きで、その空間の多様性に惹かれ、再開発事例を空間的側面から分析する研究に興味がありました。多くの事例に共通して見られる特徴が駅に直結している点で、興味を元に条件を絞っていくとサンクンガーデンにたどり着きました。

今後計画側の人間として実際にサンクンガーデンを設計をすることになると思うので、研究を通じて分かった地上との接続性と快適性をどちらも担保できるような空間作りを意識していきたいです。



永野先生より

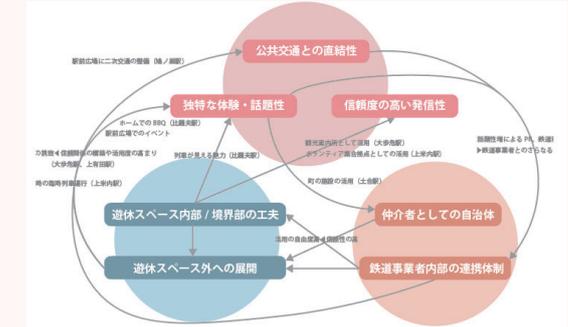
縮小の時代に鉄道インフラの価値を最大化する方法論を、日本中の小さな現場から積み上げてくれた。彼の鉄道愛好家としての視点と、大学で培った建築的思考と、J2での場づかいの経験が重なり合った、そんな研究になっていたと感じます。

永井鷹一郎 | Youichiro NAGAI

駅員無配置化によって生じた地方駅本屋遊休スペースの活用実態 - 民間非鉄道事業者による活用事例を中心に -



鉄道事業者へのヒアリングや駅員無配置化に伴って発生した遊休スペース活用駅を対象にアンケート・ヒアリング、図面調査を行った。遊休スペースの活用にあたって鉄道事業者と民間非鉄道事業者にとってのメリットや課題、その駅空間の改修・使い方の実態を明らかにした。課題としては鉄道事業者の経営体制の問題や列車運行の安全性の確保、駅員のスペースを活用することのハード面での問題等が見られた。一方、鉄道事業者と民間非鉄道事業者の積極的な連携により遊休スペースにとどまらない活用、駅の活性化が見られ、それにより活用による効果も高まっていた。



学部時代に当時の指導教員の紹介で、西頸娃駅で簡易委託を受託して宿根枕崎線の活性化に取り組んでいる方に一度ヒアリングをさせていただいた。その取り組みの中で、鉄道事業者と住民等が協力して行う駅と線路脇の草刈りがあり、それにも参加させていただいた。以来鉄道事業者と民間非鉄道事業者の連携に関心があつた。

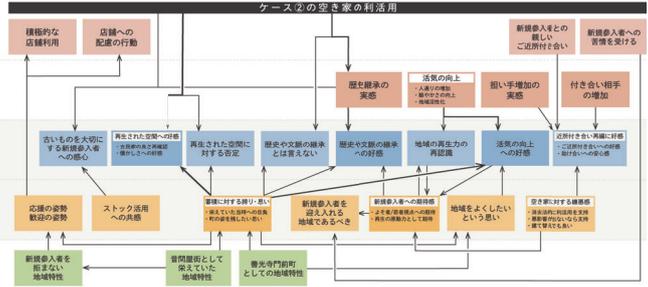
駅は鉄道と地域のほとんど唯一の接点であるということのを再認識し駅の本質がおぼろげながらわかった。であるからこそ、「究極の安全」が求められるのと同時に「人を起点としたサービス」が求められるのだと感じた。今後様々な駅に携わっていく上でもその視点を忘れずにその両方を大切にしていきたい。そして、地方ローカル線の今後を考える上で、駅からその活性化を考える必要性、運用体制を変化させる必要性を感じ、それらについても人生のどこかで取り組んでいきたい。

長谷川帆奈 | Hana HASEGAWA

空き家の利活用過程において生じる近隣への外部効果 - 長野市善光寺門前エリアにおける近隣住民の意識に着目して -



空き家の利活用物件が集積する長野市善光寺門前エリアを対象に、近隣住民へのインタビュー調査から空き家の利活用過程において近隣に生じた外部効果の実態を明らかにした。調査分析の結果、空き家の利活用過程においてその近隣には「近隣住民の意識形成」「近隣空間の環境変化」「近隣住民の行動変容」の3つの顕在的外部効果と、「近隣住民の価値観への合流」「近隣住民の価値観の体現」の2つの潜在的な外部効果が発生していることがわかった。それぞれ、顕在的外部効果は近隣コミュニティの強化、潜在的な外部効果は空き家の利活用の集積を後押ししている可能性が示唆された。

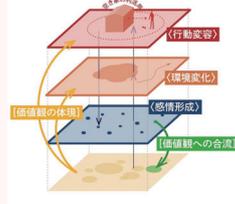


近年、空き家の利活用は、一軒一軒の空き家利活用物件の集積を通じて、点から面へとより大きな都市の再生へと展開していくことに対する期待が向けられる傾向にあるなかで、その一軒一軒ごとのごく周辺で起こっていることに対する着目が足りていないのではないかと感じたこと。

物事を都市スケールで捉えるなかでも、今回扱った向こう三件両隣のような近隣レベルの小さなまとまりに与える影響に対する視点を大切にしたい。

青木先生より

盲目的な流行のように「点から面」を合言葉に展開する空き家利活用は、個人的には疑問をもっていた。「近隣」という重要な視点の提示と丁寧なヒアリング調査を通じて、点としての空き家利活用の新たな意義を示した研究である。



平野真帆 | Maho HIRANO

暗渠沿い商業地の地理的条件がもたらす敷地内空地の形態的特徴と利用行動 旧渋谷川遊歩道路を対象として



暗渠沿い商業地である旧渋谷川遊歩道路(キャットストリート)が持つ地形や周辺環境の変化について整理した上で、敷地内空地の形態や人々の利用行動との関係を明らかにした。手法としては、建築年代の調査や空地の測量、利用実態の観察に加え、昔の通り沿いの様子に関して地元不動産への聞き取り調査を行った。結果として、暗渠特有の地形や歴史的背景に建築行為が応答することで発生した特徴的な空地の形態が類型化され、それらが通り沿いの景観に対比を生み、多様な利用ニーズを受容していることが示唆された。

永野先生より

身近に思われたキャットストリート(から)の再発見。沿道の間領域群の様相を徹底的に図化した「腕力」がすばらしい。東京らしい地形がおのずから生み出してきた、東京らしい都市デザインの一片を確かに描き出してくれました。

暗渠沿いの路地や坂道を散歩することを好む人は多く、関連書籍も出ているが、地形のあるまちを歩くときに感じる独特の楽しさは何を由来としているのだろうと疑問に思ったこと。

今回の執筆を通して、非合理的・非経済的と捉えられることが多い都市の地形や余白空間の価値を探索できたので、そのような空間のポテンシャルを生かすような都市デザインに携わることができたら嬉しいと思います。

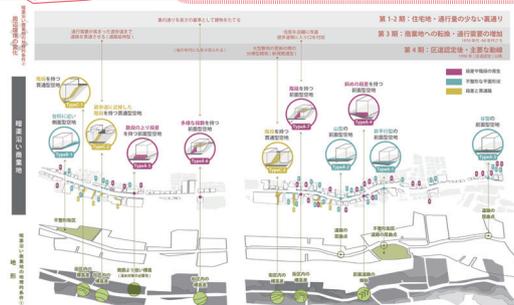


Table with 10 columns: 遊歩型, 歩道型, 歩道型, 店舗型, 店舗型, 歩道型, 通り抜け型, 歩道型. Each column contains a small image and text describing the characteristics and usage of different types of open spaces along the canal.

2023 年度卒業制作・卒業論文の足跡

前章までは修士研究について扱ってきたが、本章では学部4年生の卒業制作・卒業論文について、修士研究と同様、そのテーマや対象地の設定に至った課題意識や原体験に特に着目しながら、制作を振り返ってもらった。

【質問項目】

- 01：制作の概要
- 02：テーマの元となった課題意識や原体験と対象地の選定理由
- 03：制作で得た知見の今後の人生への活かし方

～卒業論文～

中島先生より

既往研究の整理、文献資料や地図史料の扱い、フィールドワークやインタビュー調査の内容など、どれをとっても的確で質の高い論文となった。卒業論文において民泊研究に関する新機軸を打ち出せたことに自信を持っている。

鈴木元太 | Genta SUZUKI

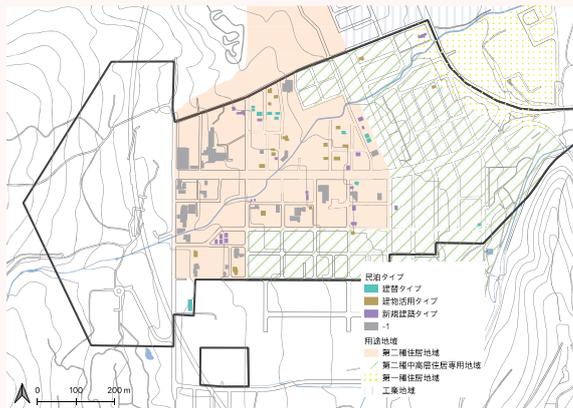
スノーリゾート隣接住宅地における民泊への転用動態と地域変容 北海道富良野市北の峰町を対象として

01



郊外住宅地でありながら、富良野スキー場に隣接し宿泊施設の集積がみられる北海道富良野市北の峰町を対象としました。近年は外国人スキー客の増加に伴い民泊が急増しています。

民泊増加の実態と住民への影響を明らかにするため、主に文献調査・目視調査・聞き取り調査を通して、地区の形成過程・民泊の特徴・民泊増加の影響を分析しました。調査の結果、持ち家高齢世帯が将来的な生活を考慮して市内市街地に転出し、土地が民泊経営者に移転する現状が明らかになりました。民泊増加に伴う地価の高騰は持ち家世帯の資産価値向上をもたらす一方、長期的には町内会員の減少や不在地主の増加により課題が顕在化する可能性も示唆されました。



僕の出身地は北海道で、北海道移住と開拓の歴史に興味がありました。当時の人々がどのように開拓し、社会を築き上げてきたのか、そして近年の社会的変化にどのように反応しているのか調べたいと思い、スノーリゾートと近隣地域の変遷に注目しました。

また、観光まちづくりの主流は小布施や由布院など歴史的な蓄積を生かした地域住民主導の取り組みを評価するものが多く、スノーリゾートは典型的な外来型開発として議論の俎上にのらない傾向があると感じたことも研究の動機となりました。

すぐにわかりやすい概念で理解しようとするのではなく、事象の多面性を前提として人々の声に耳を傾け、データや文献に向き合うことが大事なのだと学びました。

～卒業制作～

島田楓 | Kaede SHIMADA

地域のへそを開く、みんなのてらこや —多摩田園都市に「むら文化」を重ねる



青木先生より

小学校と周辺環境を含む地域資源の関係を紡ぎ直し、新築とリノベーションを複合的にデザインしたプロジェクトである。地域の課題や歴史を丁寧に調査し、地域資源や文化を継承する小学校の新たな価値を未来に提示した点が評価できる。

鉄道を拠点に開発された多摩田園都市において、開発前から続く神社のお祭りにみられる「むら文化」を手がかりに新しい教育文化拠点をつくることで、地域コミュニティを育み、少子高齢化などの変化に対応することを目指しました。設計の中心は小学校のリノベーションで、広く地域に開かれた「みんなのてらこや」をつくるべく、周辺の川や畑、林とつながるデザインとしました。



対象地は、小学校卒業まで住んでいた横浜市青葉区新石川です。住んでいた当時は例大祭や餅つき、盆踊り会などに参加して「むら」っぽい暮らしをしていたのが、都市工学科に来てから、多摩田園都市＝「まち」として自分の地元を学び直すことになりました。振り返れば、そのギャップに対する不思議さがテーマ設定につながっている気がします。

卒業制作は学部での学びの集大成として位置づけられるでしょうが、自分のバックグラウンドや人生観の表出でもあると実感しました。大学院ではまた同じような原体験から研究に発展するか、それとも自分の中に新たな出発点が見つかるか、楽しみです。

木村千咲 | Chisaki KIMURA

よりみち、よりどころ

—ふたつの道の間が織りなす豊かなくらし—

中島先生より

この作品を通じて、既存の都市構造が持つある種のポテンシャル（私たちはそれを都市空間の構想力と呼ぶ）を受け取り、それを活かして新たな建築、都市空間を提案するという都市デザイナーとしての基本姿勢を身に付けてくれたのではないかな。



阿佐ヶ谷の街の中心を担う大通りと商店街がお互いに別々の道として、その魅力や機能を閉ざしてしまっていることと人々のまちなかでの居場所が減少していることを課題とし、性格の異なるふたつの道を擦り合わせることで、その間の空間にふたつの道の持つ魅力を取り入れつつ、そこにふらっと立ち寄ることができ、地域の人やここを訪れる人の拠り所として、人々の交流が生まれるような豊かな空間となるように「よりみち、よりどころ」をデザインした。



小さい頃は商店街の人との交流があったが、チェーン店化や開発が進み、そういった体験が失われてきていることに課題意識を持ったことがきっかけ。対象地は地元でよく知っている場所であったことと、道の関係性が特徴的で面白いと思い阿佐ヶ谷を選定した。

周りの人たちの優しさと協力し合える人脈の大切さ。今後人との繋がりを大切にして、自分ももっと周りに還元できるようにしたい。自分の知識やスキルの無さを実感したので、院ではちゃんと学ぶことに時間を割こうと思った。

田邊萌 | Moe TANABE

本郷フォルケホイスコーレ

: 学びとの邂逅に導くアーチ回廊

青木先生より

忠弥坂から本郷給水所に至るまでの坂道がそのまま続くような公苑へのアプローチ空間とフォルケホイスコーレ構想の起点となる学びの場が共存するプロジェクトである。都市の余白の発見と高い造形力が評価できる提案である。



学校教育の聖地・湯島に隣接するこの対象地で、北欧発祥の成人教育機関「フォルケホイスコーレ」を土台とし、全世代の人が自身の興味対象や進路についてゆっくり悩み深めるための学校を建て一つの進路の選択肢として提示する、というコンセプトでした。忠弥坂という坂をメインストリートに周辺の文化的施設を最大限用いつつ、教育施設や水道橋を彷彿とさせるアーチが連なったデザインで、既存の公園を囲むように提案の中心となる学校施設を設計しました。



出身高校に近く馴染みのある場所であり、また大学からも足を運びやすい場所にあったというのが選定理由です。

自分自身が進路選択に悩み、もう少し時間がほしいと思ったことがきっかけで、今回のコンセプトを思いつきました。

半年弱かけてやってきた事を、対象敷地さえしらない人にもわかりやすく伝えるように8分間にまとめる難しさを改めて感じました。人に伝えるという事を意識すると自身の考えも整理出来るので、今後何かの発表の準備の際には、必要不可欠なポイントだけを抑え、また伝える順序や用いる図についても意識を向けていきたいと思いました。

星葵衣 | Aoi HOSHI

numabe re-tone

—千拓堤防から“間の岸”へ—

永野先生より

手賀沼PJが向き合う70年前にできた千拓堤防。それを根本的に問い直す環境共生型の「ヌマベ」の提案。実現に100年とかかるかもしれないが、卒業設計での問いかけはそれくらい射程が長くていい、長いからこそいい、と思います。



かつて沼の水辺（ヌマベ）で見られた豊かなトーン（エコトーンや暮らしと環境の移行帯）の消失/変化を踏まえ、分断の千拓堤防を異なる環境同士/人と沼とが交わる”間（あわい）の岸”としてリデザインする設計です。千拓で埋め立てられた土地を沼へ還すように堤防を大きく後ろへ下げるとともにゆるやかな自然堤防とし、堤外では多様な距離感で環境に関わる”働きかけのtone”や、それらを支えるビジターセンター、宿泊施設等を設計しました。



自分が実際に動く中で感じてきた問題意識から対象地やテーマを選びたいという気持ちがあったため、手賀沼PJの活動拠点であるフィッシングセンター周辺、特にエコトーンや人と沼との関わりを分断する堤防を設計の対象としました。

自分が実際に動く中で感じてきた問題意識から対象地やテーマを選びたいという気持ちがあったため、手賀沼PJの活動拠点であるフィッシングセンター周辺、特にエコトーンや人と沼との関わりを分断する堤防を設計の対象としました。

和栗千明姫 | Chiaki WAKURI 2000メートルの留まり木

八丈島空港滑走路のリデザイナー—ヒトとトリの共生起点へ

永野先生より

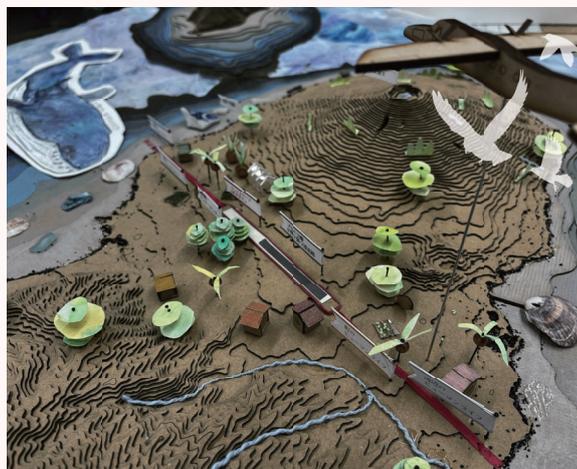
最初から鳥をやりたいと語っていた。八丈島に深く入り込み、スケッチを繰り返していた。滑走路という大胆な敷地選定には驚かされた。プログラムが決まってからは、熱中してデザインできたのではないかとよく描き切った！力作でした。



「情け鳥」の異名を持つ八丈島において、様々なヒトびとを載せたプロペラ機と多様な種のトリ達が降り発ち出会いが交錯する空の玄関口が形成される。島は渡り鳥にとって大海のオアシスとなりうるとともに、二拠点居住や島留学といった新しい暮らし方の可能性が存在し、それらポテンシャルを引き出す。ジェット機を廃止することによる余剰の滑走路の再編を波形でデザインする。波形は縦軸方向に豊かなエコトーンを形成するとともに、横軸方向にはヒトとトリそれぞれのすみかを色とりどりに形作る。

海と山など地形の制約の強さや独特風土に惹かれ、島が候補地でした。その中で八丈島に特にポテンシャルを感じたため。

具体的な空間を設計することの大切さ、今しかできない新しいことをやる。アウトプットの質の重要性。引き続き空間設計を勉強していきたいと思いました。



先生方より 2023 年度修論 + 卒制 & 卒制の総括コメント



中島先生

今年の修士論文は、論文としての基本的なクオリティが揃っていて、皆さんの発表を安心して聞くことができた。これからそれぞれの選んだ道で、実際の都市計画や都市デザインの仕事をしていくときに、修士論文で探求したテーマ、問いは皆さん自身の思考の基盤となって、これから何度も皆さんを助けてくれると思う。ここでの思考の経験は、まずは自分に返ってくる。加えて、その成果を自分だけでなく、社会のために広く発信してほしい（学会発表を期待しています）。卒業設計、卒業論文も基本的には同様だが、大学院に進む人はもう一度、チャンスがある。頑張ろう。

私たちがいま本当に向き合わないといけない都市問題、本質的に都市デザインに不足しているものはなんなのか。現代社会では簡単には見えづらい。それでもいつか、そんな問題意識へと到る論文であり、設計であり、プロジェクトである必要があると感じて止みません。だからこそ1つ1つの実践や研究は、研究室として自省し、敷衍し、本筋として束ねていかなければならない。今年の修士/卒業研究は、その土台となる事柄を強く訴えかけるものばかりでした。ありがとうございました。



永野先生

修士論文や卒業制作は、学生時代の集大成であるとともに、良くも悪くも将来の実践や研究の活動に影響を与える。今年度の全ての修士論文や卒業制作は、学生個人の興味や関心から湧き出したアイデアや知の源泉であり、次のステージにおいても大切にしてほしい。一つのテーマに向き合える時間は、贅沢で貴重であり、今後はその時間の確保が難しくなるかもしれないが、都市デザインに関わる者として一生向き合うテーマを探求し続けてほしい。



青木先生

修論・卒制のウラガワ

修士生は約2年、学部生は約1年をかけて、これまでの学びの集大成として創り上げた修士論文と卒業論文・制作。特に、最後の追い込みは修士1年の筆者が傍から見て切迫感があった。ここでは、そんな冬を乗り越えた彼ら・彼女らの息抜きとなった日々の思い出を写真で切り取る。

みんなが必死でパソコンに向かう張り詰めた研究室の空気に背中を押されながらも、息が詰まった時には10階のベランダで冷たい空気を吸い、気を整えていました。

M2 長谷川帆奈

B4 初栗千明姫

休憩中に閉じこもって寝ることを芋虫すると皆で呼んでいました。

北海道の初冬の風物詩である雪虫と格闘しながら目視調査を行いました。

B4 鈴木元太

虫だらけの鈴木くん

演習室に缶詰で作業



B4 島田楓



M2 高野楓己

PJの後輩からもらったビールで忘年会をした。



この日は永井さんが寝坊した模様

M2 平野真帆

寝坊したらスタバを奢る協定を永井と結ぶことで、午前中から研究室で作業することができた。



修論打ち上げ

お疲れ様でした！

COLUMN

POSTSCRIPT

卒業生の方々はこの1年または2年、それ以上の年月をかけて論文や制作に取り組まれてきたことと思います。ここではその魅力のごく一部しか扱っていませんが、今年のみならず、当研究室での論文や制作について気軽に触れられる1冊になっていると思います。私自身もあと1年で都市への課題意識を深化させ、論文という形に昇華させられるよう励んで参ります。

2

月号担当
M1 水野謙吾



WEB MAGAZINE

M2 最後のみなかみ訪問



#みなかみプロジェクト

最後のみなかみ訪問となるM2の学生と一緒にまちあるきを行い、引き継ぎを行いました。これからの活動に向けての話し合いも行い、来年度に向けて着々と準備を進めていきます。(M1 小林)

続きはコチラ >>>

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ia/blog/>

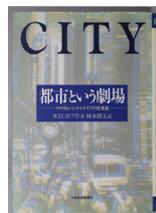


BOOK OF THE MONTH

都市という劇場

- アメリカン・シティ
- ライフの再発見 -

W.H. ホワイ特
日本経済新聞社出版
1994



目の前で観測される事象を捉え、名付けを通じて言語化する観察眼が考現学において重要な素養なのではないか。「シェーミング」「ジェイ・ウォーカー」など、本著で名付けられた事象からは当時のNYの様相が快明に伝わるとともに、そうした文化・時代を超越した人の行動の共通点も読み取れる。人々が無意識に希求する都市空間とそのスケールについて、膨大な観察調査に基づいて記述されている点においても必読の1冊。(M2 音山)